

# 時代感覚 と男の服

さて、そんな「服なんて最低限、人には不快感を与えるなればそれでよし派」であっても、「小泉首相のあのスーツでは派手すぎて国際社会における暗黙のルールから浮いてしまう」という専門家のコメントには不安を感じた方もいらしたのではないでしようか。

国際社会におけるスーツのルール。そんなものが、あるのか？ それはいつたい、いつ誰が決めたもので、どんな内容のものなのか？ それを破ると、いうことは、どんな損失をもたらすものなのかな？

スーツのルール。いろんな人に聞いても全く同じ答えが返ってくるわけがない曖昧な領域であり、しかもその答えにも建前と本音が使い分けられている、「デリケート」な問題です。ああ、

小泉純一郎首相のスーザンに、評論家や女性誌がよつてたかつて注文をつけている。といっても、「ネクタイはもらひものではなく自分で選べ」「だの」「「ワイシャツから下着が透けて見えるな」というようにしきる」のだといったお小言の多くは、批判というよりはむしろ、服装に無頓着な息子に対してあれこれと世話を焼こうとする父母の口調に近いもののように聞こえます。

# Behind Suit スーツのルール

# 中野香織 *Nakano Kaori*

東京大学大学院修了。1989年、1994年英国ケンブリッジ大学客員研究員。訳書に「性とースト」(アン・ホランダー著・白水社刊)、著書に「スーソの神話」(文春新書)等がある。日本経済新聞(金曜日)にコラム「モードの方程式」を連載中。

一ツはありとあらゆる男の理念を体現してきました。処世術にたけたジエントルマン、反体制者の気概、遊び人のきわどさ、スポーツマンの優雅な無頓着、軍人の規律正しさ、古典古代の英雄のセクシーさ、個の抑制と傑出の両立を志すダンディの粋、世間に受容されるための謹厳な品格。相矛盾し、葛藤する理念もすべて弁証法的に昇華させ、証を遺したうえで、次の世代のス

現在、言い立てられている「国際社会のルール」なるものは、スー<sup>ン</sup>の歴史を尊重することから生まれた約束事に加え、影響力のある人々が集い会うなかで暗黙裡にできあがつていった

こから生まれる存在の説得力にかかつて  
います。ああ、この厳しさ難しさ  
そしてスリリングな楽しさにおいて、  
スープの道は男磨きの道でもあるわけ  
ですね。

上着とパンツに、シャツとタイと靴

ありながら、多少のアレンジで着る人

に登場するカリズマです。

れつきとした権威によって成文化された国際統一ルールがあるならば、スーツを着る男の心はどんなにか、のどかであることか。しかし、そんなものは、ない。逆にいえば、ないところにこそ、スーツといふ衣服の存在の妙があるといえるの

スリットやポケットや襟といったディテールはもちろん、シャツを袖口から若干見せるとか、シングルのスーツは下のボタンを開けて着るといった着こなしのきまりはすべて、そんな葛藤の歴史に敬意を表する証でもあります。

慣例から成っています。だから、歴史を知り、かつて数年の慣例にござつと目配りをしておけば、「ルール」なんて恐れることはありません。そもそも一つの長い歴史には華麗なるルール破りのエピソードが欠かせないのだし。ちなみにルール破りを成功させて

